

令和5年度

地域課題調査・研究事業

農村における女性グループの地域社会への影響

福島県男女共生センター

地域課題調査・研究報告書

タイトル

『農村における女性グループの地域社会への影響』

1. 問題の所在

2015 年国連サミットにおいて「我々の世界を変革する：持続可能な開発の 2030 年アジェンダ」が採択された。持続可能な開発目標として 17 の目標が示され、目標 5 がジェンダー平等達成と女性のエンパワメントである。内閣府は優先課題の 1 にジェンダー平等の実現を位置づけ、その中で農林水産分野の女性の活躍推進を打ち出すなど力を入れている(SDGs 推進本部 2020)。しかしながら、2023 年度のレポートにおいても、日本は達成度について諸外国と比べ大きく順位を落とし、特に国会議員の数などの女性比率は低く、ジェンダー平等についてはまだまだ改善が必要だと指摘されている(Sustainable Development Solutions Network 2023)。

農村に目を向けても、全国で農業委員の女性の役職率は 12.6%にとどまるなど、まだまだ男女平等とはいえずらい(農林水産省 2023)。農業人口が年々減っている中、女性は男性を補助する従属的な存在として位置づけられていた農業における女性の立場向上は、さらに難しくなっているかもしれない(農林水産省 2020)。

こうした現状に対し、女性たちは様々なグループを結成して対抗してきた。JA 女性部を始め、農林水産省による農業女子プロジェクトなど各種活動が盛んに行われてきたのである。ただ、こうしたグループは女性農業者が中心を占め、非農家であるにもかかわらず農業に興味がある女性たちの存在が見過ごされてきた。

近年、棚田オーナー制度や市民農園などの、農との新たなかかわりづくりが注目を集めている。鶴(2018)は、農家の存続と地域の存続のために、農に興味がある移住者も含めた多様な農の主体の関わりを描き、それによってむらや地域が変化することを示している。このように、農業の多様な担い手として、移住者や農に興味がある非農家の人たちを含んだ農村に暮らす女性たちを広く捉えることが、農村における全体の女性の地位向上においては必要であると考えられる。

こうした問題意識に立ち、本研究は福島県二本松市を拠点とする女性農業グループ「あぶくまの里 農 ganic 女子」に着目する。これは 20 代～60 代の農家／非農家女性たちが有機農業の農作業を行ったり、農にかかわるイベントを主体的に行ったりしているグループである。一般的に体力や持久力が必要で「きつい・汚い」と言われている農業に、若い女性たちがなぜ取り組んでいるのであろうか。その活動は、これまでの農村における女性グループ活動がどのように引き継がれているのであろうか。2023 年 4 月～12 月に断続的に行ったフィールドワーク、メンバーの方からの聞き取り調査から、この問いを明らかにし、男女共同参画を実現するヒントについて考察していく。

2. 先行研究・目的

女性グループは、これまでの研究では男性中心の農業の世界において長らく周縁化されてきた女性の地位向上のために果たした役割に焦点が当たってきた。かつてより日本における女性の地位は低く、特に農家の女性たちは自分で何かを決める権限を持たず姑や夫に仕えて働く「角のない牛」と呼ばれていた(渋谷 2007)。そのような中、第二次世界大戦後の生活改善普及事業や農協女性組織活動によって女性の立場は少しずつ向上してきた。1975 年の国際婦人年を契機として、農政においても女性の権利が拡大してきた。1985 年には女子差別撤廃条約が批准され、1990 年に農林水産省の生活改善課が婦人・生活課に改編され、農政の女性対策の部署として正式に

位置づけられる。特に、1992 年の「農山漁村の女性に関する中長期ビジョン」は農家の女性の立場を政策的に肯定するものとなった(川手 2012)。女性農業者は起業活動も活発に行っており、今や全国の農村が弱体化している中、女性農業者は農村に活力をもたらす農村の「救世主」とまで言われるほどになっている(秋津 2007)。このように女性たちはグループ活動によって権利意識を持ちつつある。

こうした女性農業グループの一連の研究は、男性が中心である農業ありきの女性としての位置づけになりかねない。果たして、女性の地位向上や農村の地域活性化の面からみると、一定の成果を上げたかもしれない。ただ、一方で農家女性の農業離れが年々進行しているという(市田 2011)。よって、従来とは異なるアプローチによって、こうした女性農業グループを捉える必要があるのではないかと考える。

藤村美穂(2015)によると、農山村の生活は、生業としての農林漁業のかたわら、自給や楽しみをおもな目的とする営みが続けられてきており、この楽しみが農山村の生活の魅力にもなっているという。よって本論文では、この「楽しみ」をヒントとし、あぶくまの里 農 ganic 女子の活動を分析することで、男女共同参画を実現するあり方を探っていく。

3.1 調査地概要

福島県二本松市は、福島市、郡山市とともに車で 30 分程の場所にある阿武隈高原の北西に位置する面積 344.42k m²、人口 51,746 人、高齢化率 33.8%の自治体である(二本松市役所 2021a; 二本松市役所 2023a)。2005 年 12 月、旧二本松市、東和町、安達町、岩代町の合併により誕生した(二本松市役所 2021b)。2022 年 6 月には、二本松市循環型農業推進協議会を立ち上げ、2023 年 2 月、オーガニックビレッジ宣言を出している(二本松市役所 2023b)。

二本松市の中でも、旧東和町は有機農業が盛んで、1978 年に二本松有機農業研究会が立ち上がる前年の 1977 年には青年団で青年問題研究集会を立ち上げ、養蚕や出稼ぎに頼らない地域づくりのあり方として有機農業を開始している。1989 年には有機農家が 28 戸あったという有機農業の先進地である(岩崎 2023)。

2005 年には合併を機に女性の理事が複数人就任した「ゆうきの里東和 ふるさとづくり協議会」を設立し、道の駅の管理業務を受託し、農林水産大臣賞を取るなど、地域づくりの分野では先進的な取組みをしてきた(岩崎 2023)。これは 2011 年 3 月の震災時にはいち早く農産物の放射能測定を始めるなど、農を通じた復興にも貢献した(野中 2014)。

また旧東和町のお隣旧岩代町では、農家女性が直売所を立ち上げ、現在の道の駅「さくらの郷」となったりしている。さらに、二本松市全体として地域の中にサークル活動が多数存在しており、グループ活動がとても盛んな地域である。こうした農を中心とした地域づくりを行ってきた地域に着目してこそ、農をテーマにしたグループ活動の意義が明らかになると考えられる。

3.2 「あぶくまの里 農 ganic 女子」団体設立の経緯

JA 女性部の青空市が高齢化により、休止を余儀なくされたことなどに危機感を持ったことが設立のきっかけとなった。二本松地域の会社員女性、東和地域の集落支援員、岩代地域の専業農家ご夫妻、当時岩代地域で地域おこし協力隊の U ターン女性と 5 人で、農業や食に関心のある女性の学びと女性農業者同士の横のつながりをもてる場をつくろうということで 2021 年度に講座を実施した¹。

その講座は「学びをとおしてつながろう！目指せ農業女子・豊かな食」と名付けられ、講座を受講する女性グループができた(表 1)。この事業は、女性の活躍推進対策 女性農業者グループの活動支援事業の補助金を利用

¹ 2023 年 5 月 1 日聞き取りによる。

して開始された。岩代地域のご夫妻は、ご自宅で農家民宿を営んでおり、地域内外の人達の交流の拠点として、若い女性や移住者が地域のことで困ったら相談しに行く場所となっていた。

その後、「メンバー全員が、女性農業者グループを立ち上げ、自分たちで何かをやってみたい」という声により、翌年からあぶくまの里 農 ganic 女子が設立された。

Day 1 2021 年 8 月 22 日 (日)

【テーマ】有機農業とは&清峰園の取組

- ・農業現地研修「夏ほうれんそう」
- ・講話「有機農業とは」茨城大学名誉教授 中島紀一先生より
- ・講話「株式会社清峰園の取り組み」株式会社清峰園 山崎清典さんより

Day 2 2021 年 9 月 19 日 (日)

【テーマ】地元の食材を活かした料理・発酵食

- ・農業現地研修「いんげん」
- ・講話「地元の食材を活かした料理・発酵食」ソレイユ 大原陽子さんより
- ・加工所ソレイユの見学

Day 3 2021 年 10 月 23 日 (土)

【テーマ】空き家の有効活用

- ・農業現地研修「りんご」
- ・直売所見学
- ・講話「空き家の有効活用」菊地英男さんより

Day 4 2021 年 11 月 21 日 (日)

【テーマ】女性が主体となった起業活動の意義&農業と健康

- ・講話「農業と健康」一般社団法人いのちまるごと輝く 片平正子さんより
- ・講話「女性が主体となった起業活動の意義」福島大学教授 岩崎由美子先生より

Day 5 2021 年 12 月 12 日 (日)

【テーマ】農業経営について

- ・平飼い養鶏、畑を行うドカーティ夫妻の圃場見学
- ・講話「農業経営について」農山村地域経済研究所 楠本雅弘さんより

Day 6 2022 年 1 月 30 日 (日)

【テーマ】先輩女性農業者移住者に学ぶ女性農業者活躍について

- ・農業現地研修「苗づくり」
- ・講話「先輩女性農業者に学ぶ」ドカーティ有子氏より
- ・女性農業者グループ立ち上げについての話し合い
- ・講話「女性農業者活躍について」株式会社清峰園 山崎清典さんより

表 1:「学びをとおしてつながろう！目指せ農業女子・豊かな食」講座内容(あぶくまの里 農 ganic 女子 2023)

3.3 「あぶくまの里農 ganic 女子」団体概要

移住して農業を志す方、安心安全な食べ物に関心のあるお母さん、地元農家に嫁いできた方、地域の情報交換を求める方など「食と農」に関心を持つ女性で構成され、主に二本松市にて交流・情報交換できる場として活動しているグループである(あぶくまの里 農 ganic 女子 2023)。現在 27 名のメンバーが登録している(旧岩代町 7 名、旧東和町 5 名、郡山市 2 名、三春町 2 名、東京都 3 名、旧二本松市 6 名、福島市 1 名、本宮市 1 名)²。

会長 1 名(任期 2 年)、副会長 2 名、会計監査 2 名、会計 1 名、庶務 1 名が存在し、農家女性(花卉栽培、ナメコ栽培含む)9 名、実家が果樹園 1 名、農産物加工 1 名、その他会社員、自治体職員、自営業などで構成されている。10 名ほどのメンバーは移住者である(結婚を機に移住を含む)。会費は年間 2,000 円³である。

3.4 「あぶくまの里農 ganic 女子」活動内容

2022 年度は畑チームと 6 次化チームに分かれて活動していた。2023 年度はチーム制を廃止し、会費制になった。

【2022 年度】

総会…1 回

販売イベント…11 回(マルシェ、東和ふるさと祭り)

交流イベント…4 回

畑イベント…7 回

6 次化イベント…5 回 計 28 回

【2023 年度(補助金を縮小)】

総会…1 回

販売イベント…6 回(マルシェ、東和ふるさと祭り)

交流イベント…5 回

畑イベント…4 回

6 次化イベント…2 回 計 18 回

3.5 農協女性部の設立の経緯・団体概要

ここで、あぶくまの里 農 ganic 女子の設立が、JA 婦人部の高齢化をきっかけとしているとわかったため、参考として農協女性部の団体概要をみていく。

始まりは 1900 年頃にまでさかのぼる。その頃、産業組合の組合員やその家庭の女性を対象とした産業組合婦人会が結成されてきた。その後、会員数が徐々に増加し、1940 年には 40 万人が会員となった。太平洋戦争時には解散したが、第二次世界大戦後、1947 年に農業協同組合が発足し、1948 年頃から農村女性の地位向上、農業に従事する女性の職能組織として農協婦人部が作られた(JA 全国女性組織協議会 2022a)。

2021 年 12 月の時点で、JA(単位農協)は全国に 562 組織、JA 女性組織は 579 組織ある。この組織を都道府県域で統轄する組織が「JA 都道府県女性組織」であり、都道府県域組織を全国的に統轄するのが「JA 全国女性組織協議会」である。JA 全国女性組織協議会は、46 都道府県組織の代表者によって組織され、年 1 回の総会の

² 2023 年 11 月 25 日フィールドワークによる。

³ 2023 年 9 月 3 日フィールドワークによる。

決議によって、全国的な活動方針を策定する。また、JA 女性組織の内部組織として、食や農業に関心のある若い世代の女性（おおむね 45 歳くらいまで）が集まる「フレッシュミズ」（「フレミズ」と略す）が約半数の団体に組織されている（JA 全国女性組織協議会 2022b）。

活動内容は、料理教室や農作業体験などの食農教育、手芸、スポーツ、音楽、育児支援などの趣味の活動や、生活や営農に役立つことを楽しみながら学ぶ研修活動、地域の高齢者の生きがいづくり、ミニデサービスなどの施設ボランティア、高齢者向けの健康教室など各組織によって様々である（JA 全国女性組織協議会 2021）。

4. 「あぶくまの里農 ganic 女子」の特徴

これまでのフィールドワークを元に「あぶくまの里農 ganic 女子」の特徴を 3 つのカテゴリーでまとめた。

4.1 【ゆるやかさ】活動はメンバーの自主性に任されている

○活動は任意である

年に 1 度の総会には多くのメンバーが集まるが、毎回のイベントは強制ではなく都合がつくメンバーが参加する形を取っている⁴。

イベントの企画は、日常会話から興味があるものの話題が出たところから、講師を検討し、決まるような形である。またグループ LINE で企画したイベントや外部のイベントをシェアし、行きたいメンバーが集まり参加する。農 ganic 女子に所属していても、お互い一度も会ったことがなく、イベントでメンバー同士が初めて会うということもある。メンバーからは、年代にかかわらず活動が「楽しい」との声が聞かれた⁵。

○情報共有の仕方

LINE ビデオ通話などで、MTG を定期的に行っている。午後 8 時あたりが子育ての都合上ちょうどよいとのこと。庶務が LINE 上のノートに議事録を上げている。補助金の申請など事務は一部のメンバーに任されている。

○分析

農協の活動などは、メンバーにある種のコミットメントが求められる。最初は自発的に行っていても、会社員など勤務時間が固定されている職業や子育てをやりながら活動に関わり続けることは、メンバーの中にも負担感が生じる原因となる。

対して、農 ganic 女子の活動は、コアメンバーになれば、事務仕事などがあるものの、活動への参加自体はすべて自発性に任されており、こういった活動のゆるやかさは、この時代に合った団体の形と言えるかもしれない。

4.2 【地域での認知】地域に根差した活動である

○評価されることで認知が広がる

あるメンバーは、家族からの理解が大変だったと話していた。お義父さんや旦那さんに、家事や育児をやらなかったり、仕事を途中で抜け出したりして「何を遊んでいるんだ」と思われたという。補助金の手続きなどのた

⁴ 2023 年 9 月 3 日の聞き取りによる。

⁵ 2023 年 9 月 2 日フィールドワークによる。

めに平日に役所に行く必要があり大変だったそうだ。

その後、新聞に取り上げられて家族や地域の人が活動を知ってくれて、すごいことをやっている、と評判となり、今では認められた⁶。

また、福島県で行われた新農業人フェアにおいても、農業に興味があり相談に来た女性に、担当した男性農家が農 ganic 女子の団体を紹介したということもあった。このように地域において認知がだいぶ広がっている様子がわかった。

○地域のイベントへの出店

農 ganic 女子は、様々な地域のイベントに出店を頼まれている。農家を営むメンバーなどは、すでに販路を確立しているため、売るための出店ではないという。声をかけられたということで、農 ganic 女子として各メンバーの栽培した野菜や、仲間の野菜・加工品などをマルシェに出店している。東和地域の道の駅でのマルシェ、東和ふるさと祭り、二本松市オーガニックビレッジ記念マルシェ、東京イベントなど様々な規模のマルシェに出店している。

メンバーからは、もっとマルシェよりも農作業など農業に関わる活動を多くすることを望む声も聞かれたため、別メンバーに筆者が聞いたところ、みんな農作業に興味があり、その活動を多くしたいと思っているが、素人のメンバーも多く、講師となる地域の方々も繁忙期は農作業で忙しく頼めないため、講師がおらず頻繁な活動は難しいとのことだった。

○分析

集落レベルなどの狭い範囲のコミュニティでは、活動の評価の高まりは限界がある。都市農村交流のように、外から来た人たちが地域の良さを伝えて、住んでいる人たちもその地域の良さを実感するように、県の広報紙に取り上げられたり、集落の範囲を超えた人たちに評価されたりすることで、改めて地元の人たちもその活動の評価するようになるプロセスがわかった。

また農 ganic 女子というグループがあることによって、二本松市循環型農業推進協議会のメンバーにもなっていたり、様々なマルシェに声がかかり活動範囲が広がったりするなど、一個人で行動できる範囲以上の活動が来ている(あぶくまの里 農 ganic 女子 2023)。

4.3 【つながり】仲間ができ、知恵を引き継ぐ

○仲間づくり

農業に興味がある女性は少ないようで、農 ganic 女子の活動は農業に興味がある女性たちをつなぐことのできる貴重な場として機能している。

イベントは、常に facebook などでも広報されておりメンバー以外にも開かれている。キムチづくりで初めて参加した若い女性は前日に楽しみで寝られなかったと話していた⁷。次回の味噌づくりのイベントも参加したいと話しており、イベントごとに新たな出会いがありつながりが生まれている。

加えて、各地の農業関連の団体とのつながりも生まれつつある。福島県会津地方の農業女子グループとは、ZOOM の交流だけでなく、実際に視察に行き交流を深めている。有機農業で有名な茨城県八郷地区にも視察に

⁶ 2023 年 9 月 3 日の聞き取りによる。

⁷ 2023 年 12 月 17 日のフィールドワークにより。

行き、そこで作業に取り組む人たちとも交流している(あぶくまの里 農ganic女子 2023)。

さらに農という共通言語ができることで、家族や地域の中でも新たなつながりが生まれている。会社員として働く地元出身のメンバーの一人は、2023年4月から週末に近く祖父の畑で有機野菜を作るようになった。全く素人だったが、祖父に教えてもらい、素人とは思えない出来のマルシェで売れるような野菜を作れるようになった。竹細工も始めたら、父親も興味を持ち、娘、父親、祖父の交流が生まれたという⁸。

○生活知を学ぶ

団体の活動は味噌やこんにゃく、キムチ作りなど地域の住民たちが講師となるため、世代間の食文化や知恵の継承の場にもなっている。農が媒介となり、同じ地域に住んでいてもあまり話す機会がないような世代を超えたつながりが生まれている。あるイベントでは、年配の女性と若い世代の女性がコミュニケーションを楽しんでいた。

立ち上げたメンバーの一人は、幅広い年齢層の人たちがメンバーとなってくれるよう声がけをしたという。「マルシェでもイベントでも、若い人の活動だと若い人しか来ない。幅広い年齢層がいると、多様な世代が来てくれる」と話されていた。こういった知恵も、様々なグループに所属し、様々な人と一緒にイベントを企画することによって身につけたものの一つであるという。

○分析

藤村美穂(2018)が、農林業を知らない世代が役場職員となり、奥地の集落の人たちの思いを共有することが難しく、すれ違いが起こっている現状を描いているように、農作業が当たり前であった世代と、そうでない世代では、世代ごとの価値観が異なっている。そのような中、農を媒介としたコミュニケーションが異なる世代同士の関わりに起こることは、世代間が理解し合う第一歩となるのではないか。

また女性たちは自然にその地域の住民たちから伝統的に作られてきた食を引き継いでいた。イベントの講師となった住民だけでなく、イベントで出会った多様な世代とのコミュニケーションから、料理法を学んでいたりしていた。こうした場があることが、多様な機能を果たしていることがわかった。

4.4 農協女性部の活動と「あぶくまの里 農ganic女子」の比較

青井和夫(1964)によると、P.ブラウは組織体を①特定目標を効果的に達成するための手段となっている組織体、②特定の目標はもっていないが、共通の合意を成立させるための組織、③成員に内面的な満足を与えるための組織の3つに分類している。このうち農協の女性部は①、あぶくまの里農ganic女子は③に分類されると考えた。

太田原高昭(2003)は、農協の広域合併が進む中で農協女性部の活動が困難に陥り、組織の減退が続いていると述べている。農協女性部は、会員の望む活動にではなく、「経営主義のお手伝い」に動員しようとしており、役員のなり手がおらず、人が集まらなくなっているという。現在ではかなり改善されているグループもあるであろうが、メンバーが固定化しがちであり、活動も停滞しがちであるのではないだろうか。

それに対して、あぶくまの里 農ganic女子は強制力がなくゆるいサークルのような活動であるが、利潤を目的とせず、メンバーの流動性もあるような活動が行われていることがわかった。

⁸ 2023年9月2日のフィールドワークによる。

5. まとめ

これまで農 ganic 女子の活動の特徴を見てきたが「ゆるやかさ」「地域での認知」「つながり」がキーワードとして見えてきた。こうしたキーワードは、今後の農を通じた団体づくりのヒントになるかもしれない。また世代を超えた関わりの中で、女性たちは自然にその土地で培われてきた食文化などの伝統を引き継いでいることがわかった。

この活動で見えてきた活動の「ゆるやかさ」は一見、活動の持続性にとってはマイナスのように思われるが、植田今日子(2016)がむらの分析で述べているように危機に瀕した際に、その活動の特徴が最もよく現れてくる。農 ganic 女子の活動について言えば、その活動のきっかけとなったのは JA 女性部の朝市の休止だった。それを受け、立ち上げメンバーが集まったように、万が一今後農 ganic 女子の活動にも、活動の停滞や解散などの危機があらわれた場合、また次につながる新たな活動が出てくる可能性があると考えられる。

さらに「地域での認知」に関してわかったことは、地域での女性の活躍の広がりとは一致するかもしれない。活動の認知が広がるにつれて、女性への評価が高まり、女性の活動を認める気風ができ、女性が活動しやすくなる、こういった一連のプロセスを何度も繰り返すことで、地域全体として女性の立場が向上していくのではないかと考える。そうした活動が広がったときにこの「つながり」が役立ち、さらにこのサイクルを加速させるのである。

昨今、女性の立場の向上が言われているが、実際に農 ganic 女子の活動をしているメンバーと話してみると、女性としての地位向上のようなジェンダー的な考えは全く聞かれず、ただ「楽しいから」その活動に参加していた。よって、今後女性の立場向上を考えるにあたっては、セミナーや各種運動というような法的な堅苦しいものではなく、「農と関わる喜び、わくわく感」を重視した活動を通して、自然に女性たちが集まることから始まるのではないかと考える。女性の活躍、というと一部の活躍しているロールモデル的な個人の女性に焦点が当たることが多いが、グループを作るからこそ、活動の委員になることができたり、自身の認知度が向上したり、女性たちが活動範囲を広げることができることもわかった。

6. 参考文献

- あぶくまの里 農 ganic 女子(2023)「あぶくまの里 農 ganic 女子」(<https://www.facebook.com/nouganic.girl/>, 2023.6.13.)
- 秋津元輝(2007)「農村ジェンダー研究の傾向と課題」秋津元輝他『農村ジェンダー-女性と地域への新しいまなざし』昭和堂, 1-37.
- 青井和夫編(1964)『現代社会学講座 III -- 組織の社会学』有斐閣.
- 藤村美穂(2018)「第 14 章 暮らしが生み出すルール——九州の山村の事例から」『生活環境主義のコミュニティ分析』291-310, ミネルヴァ書房.
- 藤村美穂(2015)「“農的自然”に流れる時間」『環境社会学研究』21, 56-73.
- 市田知子(2011)「農家女性の『農業離れ』に歯止めかかるか」『AFC フォーラム』, 59 (9), 3-6.
- 岩崎由美子(2023)「中山間地域における農地管理と地域自治の展開 —福島県東和地域を事例に」 棚沢能生・文元春編『持続可能な農地利用のための農地法制の比較研究：ドイツ・中国・日本』成文堂, 391-431.
- JA 全国女性組織協議会(2022a)「組織概要」(<https://women.ja-group.jp/about-us/about/>, 2023.1.8).
- JA 全国女性組織協議会(2022b)「フレッシュミズ」(<https://women.ja-group.jp/about-us/freshms/>, 2023.1.8).
- JA 全国女性組織協議会(2021)「わたしたちの活動」(<https://women.ja-group.jp/know/activity/>, 2023.1.8).
- 川手督也(2012)「農村女性関連施策の展開と家族経営協定」原珠里・大内雅利編『年報 村落社会研究 第 48 集 農村社会を組みかえる女性たち—ジェンダー関係の変革に向けて—』農山漁村文化協会, 31-68.
- 二本松市役所(2021a)「二本松市人口ビジョン」

(https://www.city.nihonmatsu.lg.jp/data/doc/1626739075_doc_150_0.pdf, 2023.6.5).

二本松市役所(2021b)「二本松の歴史年表」

(https://www.city.nihonmatsu.lg.jp/bunka_sports_syo/bunka_rekishi/page001304.html, 2023.6.5).

二本松市役所(2023a)「地区別現住人口（国勢調査）令和4年度」

(<https://www.city.nihonmatsu.lg.jp/shisei/toukei/jinkou/page008887.html>, 2023.6.5).

二本松市役所(2023b)「二本松市循環型農業推進協議会（オーガニックビレッジ宣言）」

(https://www.city.nihonmatsu.lg.jp/shigoto_sangyo/nougyo/sesaku/page010506.html, 2024.1.8).

野中昌法(2014)『農と言える日本人：福島発・農業の復興へ』コモンズ.

農林水産省(2023)「令和4年度 農業委員への女性の参画状況」

(<https://www.maff.go.jp/j/keiei/jyousei/attach/pdf/josei4in-4.pdf>, 2023.6.7).

農林水産省(2020)「2020年農林業センサス」

(<https://www.maff.go.jp/j/tokei/census/afc/2020/index.html>, 2023.11.22).

太田原高昭(2003)「協同組合と女性の役割女性の力を農協運営の真ん中へ！ー協同組合と女性の役割ー」『農業協同組合新聞』(<https://www.jacom.or.jp/archive01/document/tokusyuu/henkaku/03013106.html>, 2023.1.8).

澁谷美紀(2007)「『経営の参画』から『社会の参画』へ 家族農業経営における女性の自己決定」秋津元輝他『農村ジェンダー-女性と地域への新しいまなざし』昭和堂, 39-67.

SDGs 推進本部(2020)「SDGs アクションプラン 2021」

(<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sdgs/dai9/actionplan2021.pdf>, 2023.7.19)

Sustainable Development Solutions Network (2023)「Sustainable Development Report 2023」

(<https://s3.amazonaws.com/sustainabledevelopment.report/2023/2023-sustainable-development-report.pdf>, 2023.7.19.)

植田今日子(2016)『存続の岐路に立つむら』昭和堂.